

種をまき、育てる荻窪

ーあふれる活動、多彩なまちの作り方

時代を経て培われた文化的な土壌を生かし、ハード面やソフト面の整備という「種」をまくことから、市民参加の活動を多彩なものとしてそこから新しい文化的な「芽」が出ることに。そこから、市民参加の活動が活発な、一体感のあるまちが育っていく。

土壌

■駅周辺に集まる多様な要素

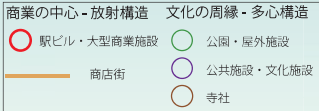
駅周辺には、南北に延びる、個性豊かな個人商店の並ぶ商店街、充実した公共施設、歴史を醸す文化施設、住宅地の中の公園等、様々な要素が密集している。これらの点には、同時にこれらの場所を核にして、多心的に街を使えるポテンシャルである。

■都市活性化拠点ー「杉並の顔」

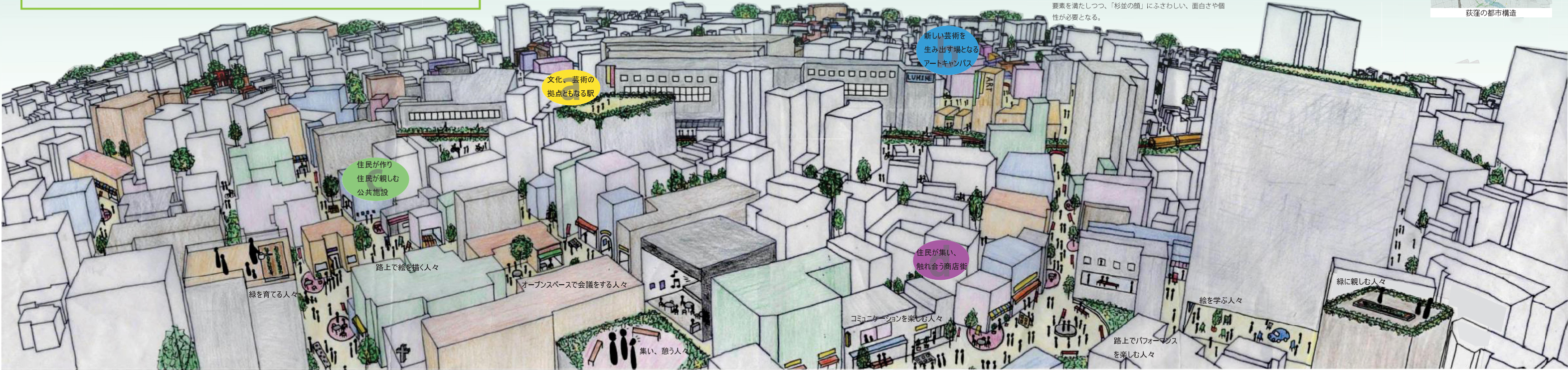
荻窪は杉並区で唯一の都市活性化拠点として位置づけられており、「働く、遊ぶ、憩う、集う」などの多様な要素を持ち合わせることが期待される土地である。これらの要素を満たしつつ、「杉並の顔」にふさわしい、面白さや個性が必要となる。

■文化的な住宅地としての土壌

大正・昭和時代から、南側は大きな別荘地が立ち並び、立派な住宅街であった。戦前には北側に新人文藝人の集まる「文化のまち」として栄えた。高貴な文化あふれる住宅地としての「らしさ」を保持するこの街が、10年後、どのようにその個性を引き継いでいるべきか。



荻窪の都市構造



種まき

1：文化インフラを整える

既存の空間にちょっとした整備を加えたり、新しい仕組みを設けることで、新しい「場所性」を与え、活動の生まれる土壌を作ります。

2：文化コミュニケーションを拡げる

駅周辺に集まる様々な要素、商店街・公共施設・駅などの空間を活用し、拠点多心型のイベントやテーマ活動を行うことで、住みよいまちに必要な要素や、「杉並の顔」となる要素を荻窪に根付かせます。イベント・テーマ活動ともに、テーマ問わず、市民を巻き込む仕掛けを用意し、市民がまちづくりの主役となる機会を創出します。

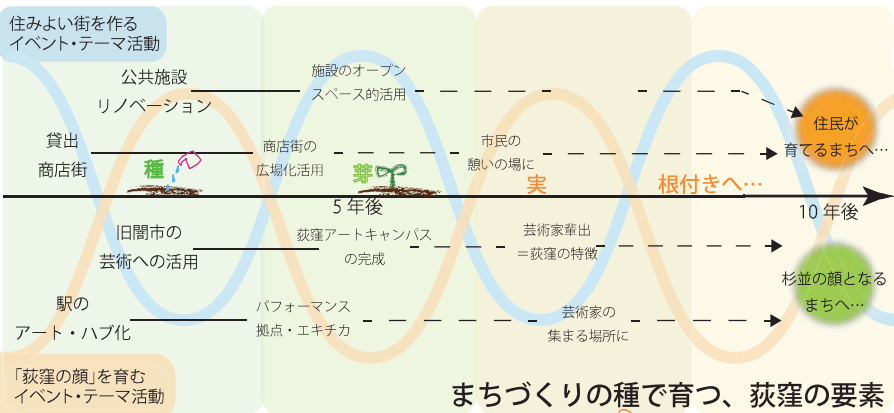
1：文化インフラを整える

- a. 駅のアート・ハブ化
- b. 旧闇市の芸術への活用
- c. 公共施設のリノベーション
- d. 商店街の広場の活用

「場所性」を育てる

2：文化コミュニケーションを拡げる活動の例

- 住民主体のまちづくり：**
 - ・みどりレンジャー
 - ・お年寄り万歳！万歳！
 - ・街を知ろう（災害対策）
 - ・まちで遊ぶ、絵を描こう（子供向けアートイベント）
 - ・残したい、私の好きな風景（景観コンテスト）
 - ・クリーンパレード
 - 芸術によるまちづくり：**
 - ・アートフェスタ
 - ・文学祭
 - ・音楽フェス
 - ・平成の闇市（フリーマーケット）
 - ・道端パフォーマンス
- …市民が主役のまちづくりを目指します



まちづくりの種で育つ、荻窪の要素

今回は「みどりレンジャー」、「アートフェスタ」を事例として紹介します！

根付いた先：既存の空間に宿る新しい場所性を引き出す（パブリックな空間、広場的空間の増加＝「憩う」場の創出）市民参加の活発な街となる一体感のある街へ

文化コミュニケーションを拡げる

住民主体のまちづくりーみどりレンジャー

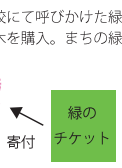
①街の緑化に貢献する「みどりレンジャー」を募り、市民と小中学生で構成する同草会を結成。



種まき



②みどりレンジャーは、街の緑化の計画をたてたり、緑化の推進イベントの企画運営を行ったり、街の樹木の保全を担う。



芽吹き



④同草会は子どものまちづくり参加の機会提供、緑の後見人として機能、まちづくりの主体へ…

芸術によるまちづくりーアートフェスタ

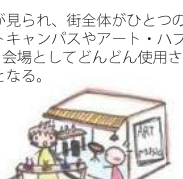
①拠点多心型の芸術イベントを行う（「荻窪音楽祭」を、同日・多拠点で開催するイメージ）



種まき



②イベント参加者や、アートキャンパスの学生が中心となり、住民にとって身近な風景（ベンチ、電灯など）の中に、芸術作品が生まれ始める。人々の間に共通の話題が生まれる。



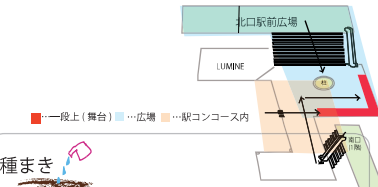
芽吹き



文化インフラを整える

a. 駅のアート・ハブ化ー南北を繋ぐ、街を繋ぐ

荻窪駅は、市民主体の街の中心として、街のハブとしての役割を担う。駅自身も活動・イベントの舞台として生まれ変わり、街は南北一体となる。



■アート・ハブの入り口

東口道路を拡張整備し、展示・表現空間として使える広場に、荻窪で生まれたアーティストの作品を用い、地域密着型の展示を行う。

■表現者による管理運営

空間の管理はこの場を表象空間として利用するアーティスト達に委ねる。彼らによる飲食販売などの一角を設け、売上の一部をこの「劇場」の運営費に充てる。表現者によって、この場所をいかにより多様な表現の場とするか、人々に PR する場にするかが決められ、発展する機会となる。

■より自由な空間へ

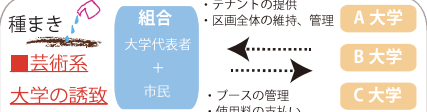
アーティストの管理により、広場を自由に生かし、創作活動がまきおこる。展示、演劇、映像、音楽…荻窪の一步目である駅が、芸術空間として定着する。

■一体感のある街荻窪へ

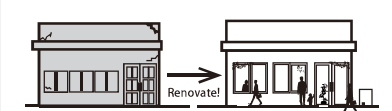
周辺商店街、荻窪アートキャンパスと連動した展示を行い、街全体でテーマを統一。駅は「一体感のある街荻窪」の入り口として、南北の空間をつなぐだけでなく、町一帯の要素をつなぐ場へ。

b. 旧闇市の芸術活用ー歴史・文化を継ぐ

荻窪駅北口の再開発予定地区（旧闇市）では、スケール感を利用して、「荻窪アートキャンパス」へ。新人文藝人輩出の地の文化を復活させる。



芸術系の大学を対象にテナントを貸出し、各大学の作品展示場にする。大学と構想に共感する市民から運営組織を作り、管理、入居審査、既存店舗との入れ替え交渉を行う。



高き制限・カラールール等を設け、既存のスケール感を残しつつ、空間の演出は各大学に任せ、個性的なものに。初期段階では数大学で行い、徐々に参加大学を増やしていく。

■荻窪アートキャンパスの誕生

芸術系の大学が集まり、展示、アトリエ、教室として使う空間となる。「芸術家輩出の地」としてのイメージが定着し、荻窪の文化発信拠点としての「荻窪ブランド」が再構築される。市民にとっては気軽に芸術に触れられる場として浸透し、学生と協働してまちづくりを行うきっかけとなる。キャンパスとして建て替えた建物にも、闇市の頃のスケール感・路地性を生かし、歴史を継ぐ建物となる。

c. 公共施設リノベーションー人と心のよりどころ

駅周辺地区を囲うようにして存在する、荻窪の歴史や文化を感じられる公共施設。これらの施設がより多くの人が利用する、より面白いコンテンツを発信する、より使いやすくなるなど、徐々に、柔軟に生まれ変わる。市民と一体となって作り出す、新たな公共施設を展開させていき、10年後、20年後の荻窪の歴史、文化の拠点としていく。

種まき

■多くの人が立ち寄れるデザインへ

会議室、公民館などのコミュニティ施設に関しては1Fはガラス張り空間にし、活動・イベントの告知を行うパネルも設置。活動の「見える化」によって、誰もが気軽に参加しやすい場所を目指します。杉並公会堂、郷土資料館等の目的持つ施設に関しては、屋外にも展示やパフォーマンスを行う空間を設け、通りすがりの人も巻き込むきっかけを作ります。

■民間運営の推奨

新しく作り出した空間に関しては、NPO 団体や企業に運営を委託し、より市民の声が反映された施設を目指します。

種まき

■公共施設の新しいカタチ

民間が運営をし、市民と共に施設をつくりあげることで、より市民のニーズに合った空間が生まれ、市民の活動の活性化を促す要因となる。また、よりパブリックな、外と内との境界の曖昧な表現空間となることで、そこできかできない、荻窪にしかない場が生まれる。10年後、20年後の荻窪の歴史、文化の拠点としての新しい公共施設のカタチ。

d. 貸出商店街ーつながりを生む商店街

南北に放射状に延びる商店街も荻窪を形作る大きな要素。ここを荻窪まちづくりの拠点と捉え、単なる「通り」から「つながりを生む空間」に変化させることにより、荻窪のまちはさらなる一体感を持つこととなる。

種まき

■「まるごと商店街」貸出

商店街一帯を会場とらえ、商店会以外の主催者にイベントスペースとして商店街一帯を貸し出す（1日5万円程）。ただし、店の営業もイベントと並行して行うことは可能とし、イベントはすべて「地元商店街の魅力発信」と並行した形で成される。いつもと同じ商店街が、新たなテーマを持ち一体化した「商店街」と変化していく。「多心型」のイベントの中で、複数の商店街をまたいで行われる企画を行い、街一帯として緩やかな共通のテーマを持つ。

■通行規制による「商店街の広場化」

歩行者天国化した道路に、ベンチや露店を出す。それにより通り一帯を広場化することで、商店街に「買い物」「憩いの場」という2つの顔を生む。



芽吹き

■商店街の広場化

「パブリックな空間」としての認識が高まり、オープンスペース的な機能を持つ。商店と顧客との距離が近づき、コミュニケーションが生まれる。店・客以上に「人と人」を意識できることは、個人商店の並ぶ荻窪ならではの魅力となる。